

日本
加レタリ
文学大系

序

責任編集 平野 謙 蔵原惟人
小田切秀雄 野間 宏 竹内 好

日本プロレタリア文学大系

序

日本プロレタリア文学の
母 胎 と 生 誕

明治三十年から大正五年まで

三 一 書 房

日本プロレタリア文学大系 序 定価二二〇〇円

一九五五年三月三十一日 第一版発行
一九六八年十二月五日 第三刷発行

編者代表 野間 宏

発行者 竹村 一

発行所 株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京(二九一)三二三一〜五
振替東京 八四一六〇番

郵便番号 一〇一

印刷 文栄印刷株式会社
製本 有限会社 佐伯製本所

落丁・乱丁本はおとりかえします

序 卷 目 次

I 小 説

第一部

兵燹中の天津	田岡嶺雲	五
東京の木賃宿	幸徳秋水	七
駅夫日記	白柳秀湖	一四
獄中生活	堺利彦	四七
廃兵救慰会	荒川義英	五三
夏	荒畑寒村	六六
佐吉	宮地嘉六	六七

第二部

二少女	国木田独步	三
昇降場	広津柳浪	一〇〇
朝飯	島崎藤村	一〇五
戦話	岩野泡鳴	一〇八

太十と其犬	長塚節	二八
かんかん虫	有島武郎	二三
和泉屋染物店	木下奎太郎	二四
軀	徳田秋声	二六
露	小川未明	二七
トコヨゴヨミ	田山花袋	二八
剃刀	中村吉蔵	二九
牛部屋の匂い	正宗白鳥	三〇
影なき人	青木健作	三一

II 評論

小説と社会の隠微	田岡嶺雲	二五七
下流細民と文士	田岡嶺雲	二五八
ヒューマニチー	田岡嶺雲	二五九
新春の第壱喝	田岡嶺雲	二六〇
一葉女史の『にこり江』	田岡嶺雲	二六五
詩人と人道	田岡嶺雲	二七〇
所謂戦争文学	幸徳秋水	二七三
日本主義を論ず	高山樗陰	二七四

暴風に寄するの辞.....

松岡荒村... 二七六

木村夢弓に与えて現代の所謂円満を呪咀す.....

松岡荒村... 二七八

ドレフュー大疑獄とエミール・ゾーラ.....

幸徳秋水... 二八二

文士としての兆民先生.....

幸徳秋水... 二八二

バイオニアアの悪戦.....

白柳秀湖... 二八五

山上憶良が貧窮問答の歌を読む.....

松岡荒村... 二八七

時代閉塞の現状.....

石川啄木... 二九二

発売禁止論.....

平出修... 二九六

謀叛論.....

徳富蘆花... 二九七

A LETTER FROM PRISON EDITOR'S NOTES

石川啄木... 二九四

新しい戯作者.....

山本飼山... 二九八

緑蔭の家.....

荒畑寒村... 三〇〇

相馬御風君に与う.....

大杉栄... 三〇三

労働運動と個人主義.....

大杉栄... 三〇八

III 詩・短歌・俳句

詩

社会主義詩人グループ

大塩中斎先生の霊に捧ぐる歌.....

児玉花外... 三〇七

紡績女工	児玉花外	三四九
運転手歎きの歌	児玉花外	三五〇
労働軍歌	児玉花外	三五〇
馬上哀吟	児玉花外	三五二
マザージョーンス	山口孤劍	三五三
戦争の歌(三篇)	木下尚江	三五三
もの種の歌	松岡荒村	三五四
飴売之歌	松岡荒村	三五五
三つの声	松岡荒村	三五六
残逆の世に寄する歌	松岡荒村	三五九
労働軍歌	小塚空谷	三六一
革命行	小塚空谷	三六二
遊君	児玉星人	三六三
工女	児玉星人	三六四
ストライキ	平木白星	三六六
鐘に寄す	山本露葉	三六七
隴頭感慨	大塚甲山	三六八
農夫	大塚甲山	三六八
塘の楊	大塚甲山	三六九

「陣中詩篇」より……………

月と病兵……………

君死にたまうことなかれ……………

お百度詣で……………

誠之助の死……………

愚者の死……………

はてしなき議論の後（一・二）……………

ココアのひと匙……………

激論……………

墓碑銘……………

愚かなるものよ……………

DILEMMA……………

野獣……………

短歌……………

週刊「平民新聞」抄……………

社会主義の歌……………

血涙吟……………

ああ戦争……………

ト翁戦争論中に現われたる一農夫をしぬびて詠める歌……………

小杉未醒…………… 二六九

小杉未醒…………… 二七三

与謝野晶子…………… 二七三

大塚楠緒子…………… 二七五

与謝野寛…………… 二七五

佐藤春夫…………… 二七六

石川啄木…………… 二七六

石川啄木…………… 二七六

石川啄木…………… 二七九

徳永保之助…………… 二八〇

佐藤緑葉…………… 二八〇

大杉栄…………… 二八二

狂醉野人…………… 二八三

中里汪洋…………… 二八三

海谷野人…………… 二八三

星山安…………… 二八三

戦争を呪う.....

過刊新聞「直言」抄

暗潮.....

山口孤劍……三八三

有香……三八三

閑野琴平……三八四

星山安……三八四

有香……三八四

無名氏……三八五

無名氏……三八五

汀秋生……三八五

桜子……三八五

緑川……三八六

赤羽生……三八六

激湍集.....

日刊「平民新聞」抄

相坂生……三八六

宮沢天韻……三八六

草風……三八七

安成懷春郎……三八七

相坂生……三八七

懷春郎……三八八

九月の夜の不平……………	石川啄木……………	三六九
工場にて歌える……………	広田 楽……………	三七一
若き機関手の歌える……………	近藤 嵐……………	三九一
工場 の 隅……………	森 園 天 涙……………	三九二
歌集「悲しき玩具」抄……………	石川啄木……………	三九三
歌集「黄昏に」抄……………	土 岐 哀 果……………	三九四
片 見 の 歌……………	田 島 梅 子……………	三九五
歌集「不平なく」抄……………	土 岐 哀 果……………	三九六
歌集「街上不平」抄……………	土 岐 哀 果……………	三九六
反国家の心……………	都会 詩 人……………	三九七
最近二年間のわが生活の記録……………	安 成 二 郎……………	三九八
貧 苦 の な か……………	鈴 木 佐 光……………	四〇〇
魂いれかえて……………	唐 木 伝……………	四〇一
機械のかげにて……………	高 崎 篤 郎……………	四〇一
	窓 外……………	三八八
	翠 湖……………	三八八
	寒 村……………	三八八
	た も つ……………	三八九

年 解 解

表 説 説

(附
録)

平 小
野 田
謙 切
秀
雄
四
三

I
小
說

第一部

兵燹中の天津

田岡嶺雲

苦なるものもとより多く、惨なるものもとより多し、而かも戦より苦なるもの亦少からん。我は昨天津に入るの途上に於て、天熱に喘ぎ、飢喝に迫り乍らも、猶銃を肩にして進み、終に路傍に倒るるの兵士を見、天津に入て、兵燹にかかれる居留地の光景を見て、我は寧ろ非戦を唱うるの人たらんと思えり、我は戦の、人なるもの世にあらん限りは避くべからざるものたるを知る、又我は戦なるものの時運を促進する上に於て利する所あるを知る。廿七八年役は縦令台湾を得ず、四億万の償金を得ざるも、猶世界をして我を認めしめたとともに、島国根性の我国人をして其眼界を濶うして世界的となしたるの利はありたり。清国は其破れたる打撃は酷なりしも、猶為之に自強の努めざる可らざると風氣革新の已むべからざるとを自覺したり（これがために清国の孱弱を暴露して、露独の野心を遂げしめ、東洋の時局を艱にしたるは、遼東還附によりて我國

の怯を示し、我を侮らしめたるに由るものにして、寧ろ此役の罪にはあらず）故に我は一国の進運を促すものが革命たるが如く、世界の進運を促すものは国と国との戦なりと信じたりし也。而かも今日のあたり、戦の苦と惨とを賭るに於て、血を以て買わざるべからざる戦の利のあまりに高きを感じて、我は非戦論者たらんと欲するも能わざる也。

我は塘沽より火車中に於て、沿道の民家が悉く火を放たれ、無辜の民が恨を呑んで路傍に撃殺せられあるを見て、無惨の極と思えり。鉄道の開通を安全に防備する上に於て匪徒をして隠匿する所を失わしめんがためには、此策も亦已む可らざるものたるべしといえども、無告の良民が其財産を烏有にし、鋒刃にかかりて死し、然らざるも其妻孥は離散し田圃は踏にじらるるの哀を想えば、誰か為之に撫然たるを禁じ得んや。況や軍事の防衛上に用なきもただその惨酷なる、血に飢えたる虎狼の心を飽かしめんがために此の種の惨事を行い、以て快とせるの跡を見るをや。我軍規の敵を以てするも、二十七八年役当時に於て猶いまわしき強姦掠奪は至る処に密に行われたりというにあらずや。況んや規律なく暴戾なる他国兵をや。此をしも殺伐なる戦時に於て不可避の事なりとせば、我は益々以て戦の非なるを決せざる能わず。

此思想は天津郊外の一村落が、方に烟焰につつまれある現状を目撃するに於て、益々堅くせられたり。我眼に先ず映じた事は、其村落のとりつきの家の戸前に人の黒く焦げ

てうつ伏に僵れたる也。家は全く焼落ちて、火に燵ぼれたる壁土の壊れたる上に、小き一個の木箱のガラス蓋をはれるに、内には紅き白き、さまざまの色の組糸の類、容れられて其箱もそのままに、糸の色も未だ鮮かなるが掘出されあり。此者の其死すべき刻下までも、此家の門前に露店して商い居れるものなるべし。あわれ彼、其日に終るべき命とも知らで口を糊う其日の活計に追われたりけん、養うべき親やありたる、妻子やありたる。此の如きは彼一人にはあらじ、沿道に僵れたりしもの、又火炎中に焼死ぬるもの、いづれか哀れの数にもれん。文明の戦は無辜を犯さずというも、戦というものに相犯す也。已に戦あれば其殺伐の気の溢るる所、勢無辜を害うに至らざるを得ず。故に我は若しありたりとするも二十七八年役に於ける旅順の虐殺を以て列国に対して愧ずるに足らずとし、又今次に於ける露兵が沿道の民を、老若男女の別なく殺したりというの風説をも、我は戦時に於てはあり得べき事恕す可き事なりとして、之と共に我は寧ろ此に至るべき戦なるものを根本的に非認せんと慾する也。

此村落は挙げて焼かれたり。多くは焼落ちて堆き灰燼のうちより烟竈上る。敗壁残墟の燃のこれるが黒く焦げて、昔のさまの名残をとどめるのみ。中に一寺の宏尙なるが、半やけて猶お火災のうちにあり、やけ落つる物音凄しく、烟を捲き焰を噴き、紅の火影、暮早き後の森の蒼きを焦す。民は死ぬる乎、逃れたる乎、隻影もなければ、かかる

巨利をやくるに任せたるは無残なり。居留地に入れば最も安全なりしという我領事館の四辺すら家の砲弾に焼けたるもの多く、火事になれて驚かざるに、誰消さんともあらねば、三日前よりとの火の猶燃残りて焰を吐きつ、雨もつ聞き夜の空に映る。燃落ちたるは、煉瓦の四壁のみ壊れたるままにやけ残りて巨人の骸骨のように凄し、支那人は其家を捨てて逃散し椅子卓子の類は委棄せられたるままに浪蕪たり、其空屋の多くは兵の営舎となりて哨兵の剣いかめしく光れり、外人の家も皆堅く戸を閉じたり、時に戒装せるものチヲホラと往来う外は、路上寂として人の影稀なり、夜ゆけば哨兵に誰何せらる。支那人の外人に儲われたる徽号なきものは、二言ともいわず皆殺さるべし、龍鐘たる一老婆の、六十を超えたるべきが、唯一人さまよえるが我に胸の十字架を指して危害なかるべきやの旨を手真似にて尋ねたる、恐れおののける様見る目にも、いじらしかりき。旧の開平鉱務局に在る我司令部に亦避難の清人あり、鉱務局の吏員の家族などにやらん、我見たるは一人の老嫗と、玉の如き小女の十才許なるが、奴僕の肩車にのりて、屋の一隅なる暗き窖の中に入るにてありき。

領事館にては胸壁を築かんとて羊毛の棚庭に堆く、門前の路には柵をゆい、胸壁用の毛柵の猶散乱せるは、敵の押寄するを決死して此処に喰止めて安全を万一に僥倖したるなるべし。当時敵の砲撃の激烈なりしも知るべく。我をして端なくユーゴーが、レ・ミゼラブルの末尾、仏の市民が市